

宣教師 J. L. アッキンソンの伝道とその性格

竹 中 正 夫

はじめに

神戸は横浜と共に、いち早く開港地となり、外国から宣教師がやって来てキリスト教の拠点となった。同志社と歴史的関係の深いアメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions) の最初の宣教師 D. C. グリーン (Daniel Crosby Greene) は、1869 (明治2年、11月30日に横浜に到着し、翌年3月31日に神戸に来て定住した。のちに、神戸にはアメリカン・ボードの神戸ミッションステーションが形成され、中国・四国地方一円にわたる伝道の拠点となった。¹⁾ 本論文においては、グリーンによって設立された摂津第一公会 (現日本基督教団神戸教会、明治7年4月19日設立) の育成者となった J. L. アッキンソン (John L. Atkinson) に光をあて、主として、彼がアメリカン・ボードにあてた書簡を通してその働きとその性格を究明し、神戸ならびに中国・四国地方の教会に与えた影響について考えてみたいと思う。

人間は、それぞれの個人においても、また、集団の形成においても、環境の影響を受けていることはいうまでもない。カール・マルクスは、社会的環境の重要性をとき、和辻哲郎は風土的環境の影響を指摘した。同時に、注目すべきことは、人と人との関係である。開港地神戸にやって来た青年たちは、どういふ宣教師と結びついたか、また彼らの背景は多様であったが、どのような人脈的関連があったかということは興味ある課題である。1874年に神戸の教会が設立されたのは、官許同志社英学校開校の一年前であったから、同志社の人びとの影響は初期の神戸教会にはみられないのは当然で、むしろ、慶応義塾に学んだ人びとや福沢諭吉の影響を受けた人びとが少くなかった。

たとえば、摂津第一公会の創立会員の一人、前田泰一は慶応義塾の卒業生であり、同じく同教会の役員をつとめ、わが国最初のキリスト教週刊誌である『七一雑報』の発行人となった今村謙吉も慶応義塾で学び、一時高知で教師をしていた人である。また今村とともに『七一雑報』にかかわり、編集人をつとめ、かつ、兵庫教会の初代牧師となった村上俊吉は、慶応義塾の卒業生ではなかったが、福沢の影響を受けた人であった。村上俊吉は、東京麻布で1847（弘化4）年7月15日に代々医師をしていた福地貸庵の末子として生まれ、のちに三田藩の藩医村上恒庵の養子となり、俊庵といていたが、父が亡くなり医師をやめ、俊吉とあらためた。廃藩置県のもの、三田藩は英学をすすめて、西洋文明の導入につとめた。村上は1872（明治5）年神戸から船に乗って東京に赴き、慶応義塾に在学中の九鬼隆一を訪ね、その紹介で福沢諭吉に面会し、同年4月福沢が三田に来て、有馬に逗留したときにも友人と福沢を訪ね、そのすすめで有馬に二泊している。²⁾村上は福沢のはからいで当時丸善の社長をしていた早矢仕有的に紹介され、同年9月から、横浜の丸善で約二カ月ほど働き、のちに、神戸に帰って三田人の合併会社である志摩三商会で働くようになった。こうした関係から、丸善から三田に送られた書籍の一つに『天道溯原』をみて、村上をはじめキリスト教に接したのである。慶応義塾で学んだ人びとの人脈のもう一つの例をあげると、のちにのべるように、1876（明治9）年にアッキンソン宣教師が二人の神戸教会員（鈴木清、小野俊二）をともなって松山に赴いたとき、松山で彼らを迎えた、黒田進、菱田嘉平の二人は、慶応義塾で学んだ人びとであった。³⁾また当時、松山藩によって建てられた英学塾の教師として招かれた草間時福は、慶応義塾の卒業生であり、のちに変則中学の校長をつとめた。なお小野英二郎の記録によると草間時福は1881年に交詢社の仲間と一緒に京都で政談演説をしている。このことは、福沢諭吉が直接キリスト教をすすめたことを意味しないが、慶応義塾に学んだ人びとが文明開化に対する開かれた姿勢をもって宣教師たちに接していったことを示している。

明治初期に神戸に到来したアメリカン・ボードの4人の宣教師の場合をみると、それぞれ感化をうけた人びとをあげることが出来る。すなわち、D. C. グリーンと接触し、その影響をうけたのは関貫三（のち松山高吉）であり、彼は

1874 (明治7) 年6月グリーンと共に横浜に赴き、新約聖書の翻訳にあたった。グリーンについて1871 (明治4) 年11月に神戸に到着した J. D. デイヴィス (Jerome Dean Davis) のところに英語を学びに来て、ハウスボーイのようにして住み込んで働いたのは三田出身の杉田 (元良) 勇次郎であった。同志社開校にそなえて、1875 (明治10) 年10月にデイヴィスが京都に移ったとき、杉田勇次郎も京都に赴き、同志社の最初の学生となっている。つぎに神戸に来た⁴⁾アメリカン・ボードの宣教師 J. L. アッキンソンの親しい協力者となったのが、村上俊吉であった。その後、神戸に来た O. H. ギューリック (Orramel Hinckley Gulick) と出あい、彼と共に働いたのが、今村謙吉であった。今村はギューリックと共にハワイにも赴き、また彼の支持で『七一雑報』の発行に携った。こうした宣教師との師弟関係、そして協力関係は、その後も一般的にみられるが、とくに初期の開港地において顕著であった。本稿においては、これらの人脈において、主として、J. L. アッキンソンの働きと影響について考究しようと思う。そこには、二つの理由がある。一つは、さきにのべたように神戸ミッションの設立者グリーンは教会設立の約2カ月ののち、横浜に赴き、そのあとをうけついで J. D. デイヴィスも翌年10月に京都に移ったのに対し、アッキンソンは1873年に神戸に到着してから1908年に神戸を出て横浜でなくなるまで35年神戸に滞在し、神戸を中心とした神戸ステーションの中心的存在であったということ、第二は、従来からアッキンソンの名前は神戸ステーションの有力な働きをした宣教師として知られているにも拘らず、彼の性格や働きの内容については殆んど知られていなかったことである。そこで筆者はアメリカン・ボードに送ったアッキンソン書簡を丹念に読み、その足跡と特色を辿ってみた。なお、アッキンソンの書簡は他のアメリカン・ボードの宣教師たちの書簡とともにハーバード大学のホートン・ライブラリーに保存されている。戦後関西学院大学の川村大膳教授がそのコピーを入手された際、本学のオーテス・ケーリ教授のはからいで同様のコピーが設けられ、同志社大学アメリカ研究所に収められている。しかし、最初のAの部門が欠落しており、したがって初期のアッキンソンの部分が欠如していた。今回の研究のため、同志社大学人文科学研究所の杉井六郎教授がその部分の資料を補って下さった。これらの方々の御尽力を

記し謝意を表したい。

1. 英国生まれの粘り強い人

従来から知られてきたアッキンソンについての記録は、『天上之友』に掲載された記録⁵⁾と、高尾哲氏が訳出された1876(明治9)年の四国伝道の報告書⁶⁾であった。本稿ではそれらを参照しながら、主として、アッキンソンがボストンのアメリカン・ボード本部に書き送った書簡を辿ることによって、その働きと性格をのべてみることにする。

アッキンソンは、1842年8月12日英国ヨークシャー州のウィスク村(Wiske Village)に生まれた。彼は、ニューイングランドで生まれ育ったヤンキーではなく、英国生まれのジョンブルであったことは、彼の性格に影響していると思う。アッキンソンが1908年に永眠したとき、彼を記念して『旭光』は追悼文を掲げ、その中で彼の性格をつぎのようにのべている。

翁は元来主義の人、意志の人なり。その主義を主張するに当たっては些かも人情を顧みる所なし。然れども亦その家庭にあつては人情の人なり⁷⁾

彼の父は学校の教師であったが、幼少のときなくなった。英国のレットフォード(Retford)で教育を受け、12歳の時に米国に移住し、アイオワ州の叔父の許で育った。19世紀中葉という、カール・マルクスやチャールズ・ディケンズが労働者階級の悲惨な状況を叙述した時代であり、幼くして父親を失い、辛苦の中に、信仰をもって強く生きる意志を培養してきたことがうかがえる。

2. 宣教師として

アッキンソンは1866年から1869年までシカゴ神学校で学び、将来の働きにそなえた。その間、シカゴ神学校で、のちに神戸で伝道したD. C. グリーン、J. D. デイヴィスがアッキンソンと共に学んだ学友であったことも興味深いことであった。1869年6月に彼はC. E. グーンセー(Carrie E. Guernsey, 1848—1906)と結婚した。彼女の父は、アイオワ州の会衆派教会の国内伝道の総幹事をつと

めていた。結婚後彼は4年間アイオワ州のアールヴィル (Earlville) の会衆派教会の牧師をつとめた。

(1) 宣教師としての姿勢

アメリカン・ボードの絵幹事 N. G. クラーにあてた1873年3月19日付の書簡において、アッキンソンはつぎのようにのべている。

わたしは、今日までにデイヴィス兄弟から手紙が来ると思っていましたが、とうとう来ませんでした。おそらく4月までは次便は期待出来ないと思います。いろいろの理由からわたしは残念に思っています。わたしたちは、わたしたち自身のためにも、そして、教会の人びとのためにも、この事態をあまり遷延出来ないと思っています。

日本に赴くことについての課題が、いまだ解決していないことは、おわかりいただけることと思います。主はこの冬のわたしたちの働きを豊かに祝福して下さいました。わたしたちは、非常に忙しく働きましたが、同時に多くの改心者を得ることが出来ました。ですから、日本に往くことがわたしたちのなかにまだ十分に固まっておられません。わたしたちは出来るだけいろいろの角度から問題を考えて来ています。この地に根をおろしたものをすべて引きあげてしまうこと、わたしたちの子供たちのこと、そしてわたしたち夫婦のこと、さらに教会のことなど。とにかくたしかなことは、主がわたしたちを送りたもうということです。このことのみがわたしたちの毎日の祈りであります。わたしたちは、主がわたしたちを導いて下さると信じています。わたしたちは、主の導きを期待するが故に彼の約束を待ち望んでいます。「もしも、主がわたしたちと共に行かないならば、わたしたちは行かない」。これがわたしたちの祈りです。⁸⁾

文中のデイヴィス兄弟というのは、かつてのシカゴ神学校時代の同級生でそのころ神戸で宣教師として働いていたジェローム・デイヴィスである。宣教師として遠い国に往くにあたってさまざま案ずるところが少なくなかったことがこの書簡にはあらわれている。同時に「もしも、主が、わたしたちと共にゆか

ないならば、わたしたちは行かない」(If the Lord do not go with us, let us not go) とのべ、宣教師として日本にゆくにあたっての基本的姿勢を表明している。宣教師になって外国に赴く重要な動機を彼はここに明白にあらわしている。

アッキンソン一家は1873年9月28日神戸に到着した。サンフランシスコから横浜まで25日、1日横浜に滞在しての長旅であった。彼は神戸到着の第一報をつぎのように、アメリカン・ボードに書き送っている。

わたしの妻と、子供たちとともにわたしは無事に日本に到着しました。日本丸は良い船で横浜まで25日のつつがない旅をつづけることが出来ました。一日の滞在ののち、コスタリカ丸に乗り、9月28日の日曜日の朝神戸に到着しました。⁹⁾

(2) 幼女の死

彼らは神戸に着いてから間もなく、予期しない悲劇を経験した。それは3歳6カ月であったメイという長女が脳髄炎のため3週間ほど苦闘し、この世を去るといふ痛ましい経験であった。その悲しみを彼はつぎのように記している。

まず家族の経験から記しましょう。わたしたちが当地に来たときから、わたしたちの家族の人数は1人減りました。というのは、長女のメイがなくなったのです。3年6カ月にわたって彼女の存在はわたしたちの喜びでありました。美しく輝いていた光が忽然と消えてしまったのです。

もしも、あなたが幼児を失った経験がおありでしたら、わたしたちがどんなおもいでいるがよくおわかりいただけると思います。もしそういう御経験がない場合には、おそらく、おわかりいたんだけないでしょう。かつてわたしは幾度か小さな棺の傍に立って神のことばを語り、愛するものを失った人のおもいを理解したように思っていました。しかし、それは、はるかにかけ離れたものであったことがわかりました。キリストがその死に際して「しばらくすればと言われたのはどういうことか。わたしたちにはその意味がわか

らない」〔ヨハネによる福音書16：18〕といった弟子たちのように、わたし¹⁰⁾たちもこのことの意味をわかりかねているのです。

災害はつづくもので、長女が臨終の床にあった晩に、アッキンソン家に盗人が入り、夫人が父親から結婚にあたってもらった金の首飾り、母親が愛用していた金時計、母親の髪でつくられた腕輪、アッキンソンの長靴や洋服などが盗まれた。彼らのショックと悲しみはひとしお大きかったにちがいない。

(3) 開拓的宣教師

アッキンソンは形成された神戸の教会を中心に開拓的伝道に励んだ。彼は、丹念に神戸を中心にした伝道圏の展開につとめた。日本組合基督教会教師会が発行した『天上の友』は、アッキンソンが伝道し、初期の教会形成に尽力した神戸近郊の教会としてつぎの諸教会をあげている。

初来博士が深き関係を有したる諸教会を挙げれば、神戸、多聞、兵庫、明石、西ノ宮、三田、姫路、高砂、山崎、龍野、北條、三木、豊岡、出石、篠山、柏原等にして、時には四国諸教会の主任を兼ねし事すらあり、日本に在る宣教師中博士の如く多数の教会を取攬せしものは稀なるべし¹¹⁾

アッキンソンは神戸近隣の伝道にあたったのみでなく、中国、四国地方に福音を伝える最初の宣教師となった。すなわち1876（明治9）年3月24日から4週間にわたって松山および今治に伝道旅行を試みている。この伝道旅行の報告書は、すでに高尾哲氏によって訳出されているので繰返してのべることを避けるが、松山の人びとの招きによって、アッキンソンが神戸の教会の会員である鈴木清と小野俊二の2人を伴って、危険と困難をおかして伝道旅行にあたったことを知ることが出来る。

アッキンソンは第二回の遠路の伝道を、翌年（1877年）5月に行っている。それによると、5月7日に神戸を出て、明石、姫路で集会をもち、岡山、玉島、福山、尾道を経て四国に渡り、今治、松山を訪ね、6月4日に帰神している。この旅行には、横山（二階堂）円造、小崎弘道を同伴している。姫路にお

いては、儒学者田島藍水の家に招かれ、そこで3回にわたって集会を開いている。周知のように藍水の二人の娘は、それぞれ神戸に出て英和女学院（のちの神戸女学院）で学び、長女善（ぜん）は小泉敦と結婚し、次女多哥（たか）は澤山保羅と結婚した。姫路における働きをアッキンソンはつぎのように記している。

5月8日、姫路に向かう、神戸から約30マイルの城下町に着く前に、わたしたちは、わたしたちの女学院に孫娘の学んでいる婦人の出迎えをうけた。その娘の姉は一時タルコット女史に日本語を教えていた。彼女は大阪にいる熱心なキリスト者の妻となっている。わたしが、その結婚式の司式をする喜びをもった。彼女は、極力自分の家に泊ってゆくようにと懇望した。外国人が厄介になることは大変なことだと思って固辞したが、ついにその家に泊った。わたしは、その家の親切を忘れることが出来ない。その家の客間で3回の集会をもった。出席した人びとは、同家の家族、親しい友人たち、学生たち¹²⁾などであった。

岡山では中川横太郎の案内で一日4回集会をもっている。その中には、儒者とその弟子たちに使徒行伝17章をテキストとして説教をしている。岡山で玉島の戸長と医師に偶然出あい、予定を変更して玉島に赴いている。玉島の戸長は『七一雑報』に関心を示し、12人の購読者をあつめ、購読料を渡すと共にアッキンソン一行の滞在費を支払っている。笠岡では絹糸製造場で集会をもった。なかには、異教をかかえた外人を招いたのかと主催者の医師にくってかかるものがあつた。福山では、医師の会で話しをし5月20日の日曜日には城中で60人から70人の人びとと集会をもっている。彼らは尾道で30人から40人の人びとに話しをし、6人の人びとが『七一雑報』の申込をなし、6ヵ月分の購読料を支払っている。水曜日（5月23日）彼らは、尾道から舟を雇って今治に渡った。前年の訪問のときより、仏教の僧侶たちの反対もあり、今回はややひかえ目の形で集会を開いている。また、讚美歌をうたうことに関心が強まり、同伴の横山や小崎とともに合唱の練習をしている。5月28日（月）今治から松山には小

舟で出かけたが、折からの逆風のため5マイルを漕ぐのに5時間もかかり遂にあきらめて今治に戻り、その夜10時に徒歩で今治を出発し、二つの山を越えて松山に到着したのは翌日（5月29日）の正午ごろであった。

松山では、先年に関心をもつようになった人が姿をみせなくなったり、神道や仏教の方からの反対や、西南の役の影響もあり、宗教的関心より政治的関心が強くなり、教勢が進展しない状況が報じられている。そうした中でも、そこに定住して福音を伝える宣教師が派遣されることを望んでいる。彼らは松山から三津浜に至り、6月1日（土）2日（日）には同地の旅館で礼拝をもち、この国の人びとが、キリストにある平安を得るようにと祈念している。彼らは、三津浜から船で神戸に帰っている。

その翌年（明治11年）の4月アッキンソンは、村上俊吉ともう一人の青年をともなって高知伝道に赴いた。その斡旋をしたのは、板垣退助と親しい関係にあった岡山の中川横太郎であった。¹³⁾ 思えば、これが土佐の地に福音がもたらされた最初のことであった。彼らは板垣の厚意によって高知の鏡川に添うたところに一軒の家を借りうけ、そこを根拠にして、約3週間滞在して伝道に励んだ。彼らは立志社の協力を得て、植木枝盛、栗原亮一の二人が学術演説をなし、アッキンソンおよび村上はキリスト教について約600~700人の聴衆に講演をなしている。彼らは、5円ばかりの聖書類書を持って高知に行ったが、全部売り尽したという。¹⁴⁾ 板垣もやって来て講演をきいていた。帰途、潮と風の関係で船が出帆を見合わせて待機していたとき、板垣の娘がもう一人の付き添いの女性と共に小舟で一行の乗る浦戸丸を訪れ、父の代わりとして送別の挨拶をなし、数種の珍しい楽器を持出して、相ついで合奏し一行の労をねぎらった。村上俊吉は、そのときの情景をつぎのように記している。

時に窓外を眺むれば、月は江心に浮び四山の夜色は愛すべく、^{おちこち}遠近を行きかふ小舟の櫓の^{おし}音までが音楽の如くで神戸の波止場で聞くに比しては、¹⁵⁾数倍の雅致があるように覚へた。

はじめての高知伝道の労を医す絵のような光景であった。

なお、この第一回の高知伝道旅行の際に売れた書籍は下記の通りである。「日本訳の聖書凡て109冊、支那訳は新約8冊、新旧5部其他註解本と道に関する書類234冊総計346冊なり」。(『七一雑報』明治11年5月3日、第3巻第18号。)

この後、高知には同志社から宇野(吉田)作彌が夏期伝道に赴いたが、本格的に高知伝道がすすめられたのは、それから9年後のことであった。なお、アッキンソンは明治20年、11月土佐教会設立式に出席するため長田時行、(多聞)辻密太郎(大阪)横田勝治、(神戸)千足甚左衛門(西宮)、松村竹夫(明石)などととも高知を訪ねている。¹⁶⁾

3. 日本人教職者の養成

上述のようにアッキンソンは、神戸近郊から四国、中国にかけて伝道にあたった。彼は日本人の伝道は結局は日本人があたるべきであると考えていた。あくまでも外国人である自分たち宣教師はそれまでの役割を果たすものであると自覚していた。それ故に、彼は日本人教職者の養成に力を注いだ。彼の属していたアメリカン・ボードは、それぞれの地域の教会の自由と独立を尊重していた。そして、アッキンソンは、日本人が自立独立の精神をもち、その能力もっていることを確信していた。彼はボードに宛てた手紙においてつぎのようにのべている。

われわれの仕事は、きわめてお金のかかる仕事である。だから出来るだけ早く仕事を終えてつぎの場所に転ずる必要がある。現在なされている財的援助を取りさげてもさしたる困難はないと思う。日本人は、きわめて自主的な国民で、一日も早く外国からの援助をとりやめることを喜びとしている。たしかに、なかには例外もあるが、それが原則である。わたしたちは外国人であり、どこまでいってもそのことに変わりはない。時がたつにしたがって、彼らは、わたしたちをさらに大事にすることと思う。しかし、彼らは、出来るだけ早く自分たちの仕事を自分たちで運営し、自分たちの財力でまかなうように願っていることは、きわめて明白なことである。¹⁷⁾

アッキンソンは各地の伝道に赴くときにも、二、三人の日本の青年を同行した。それは、彼が助手を必要としていた面もあったが、日本の青年たちに伝道の経験を与え、実地訓練をなすということを考えていた。

(1) 蒸気機関車火夫論

アッキンソンに対する他の宣教師の批判として、彼はよく伝道をするが、自分がいくつもの伝道地の教会の牧師を兼ねて日本人の教職者に委ねないという声があった。それに対して、彼はつぎのようにのべている。

わたしは、教職につこうとしている日本人は訓練を必要としていると思う。まだ充分な知識や可成りの資格を備えていないのに、あたかもそれらが充分あるかのように思いちがいをする危険性がある。神戸と大阪の間を走っている蒸気機関車に乗っている火夫たちは、まだ6カ月かせいぜい1年位しか蒸気機関車に接していないのに、長年にわたってその仕事に携わっている英国人機関手のように充分に運転が出来るように思うかも知れない。しかし、政府は、この点をよく考えて、火夫がその務めを可成り長くするにはかっている。いまはその人はそれをあまり好まないかも知れないが、その道が賢明であったとやがて思うにちがいない。そのように、わたしたちは、日本の牧師となる人びとを教え導き、彼らが責任を果たすに必要な資性を備えるまで、助手として訓練する必要がある。¹⁸⁾

(2) 沢山保羅と新島襄について

日本人教職者の養成をめざしたアッキンソンは、海の彼方で研鑽をつんでいた沢山保羅が帰国して日本の教会の牧会・伝道にあたることを期待していた。ボストンののアメリカン・ボードに書き送った書簡のなかで沢山保羅にふれてつぎのようにのべている。

わたしは、エヴァンストンに現在いるか、あるいはかつていた日本の青年がボードによって採用され派遣されないことを喜んでいます。わたしたちは、彼のように日本人で教職者となる人がやがて出てくることをのぞんでいる。それから、新島についてのわたしの意見は、彼に対する援助は、彼の学

校における教師の給与として払われるべきであるということです。¹⁹⁾

この書簡の日付は、1876（明治9）年3月24日であり、沢山保羅はまだ北米に滞在中であった。「エヴァンストンにいるか、あるいはいた青年」とは明らかに沢山保羅のことである。周知のように、新島襄は、アメリカン・ボードの準会員（corresponding member）としてボードから派遣されて日本に帰国した。アッキンソンは、沢山保羅がボードの派遣ではなく、日本に帰ってくることを喜び、やがては日本伝道に日本の教会の支持をうけて働くことを切望していることを知ることが出来る。また、アメリカン・ボードから援助をうけていた新島について、彼に送っている援助金は、彼の同志社における教師の給与に限定すべきであるといっていることは、注目すべきことである。そこには、日本の教会や学校の主体性を重んずべきであるというアッキンソンの姿勢があらわれている。また、創立当初の同志社の中心人物として尊敬されていた新島襄のことについても率直に意見をのべているところに彼の主体性をみることが出来ると思う。

なお、アッキンソンの書簡にはいま一回沢山保羅にふれているところがある。彼は西日本の伝道を神戸を中心に考え、神戸、大阪、京都、の外に松山、広島、名古屋の六都市にミッション・ステーションをおく計画をたてていた。そうした構想から、沢山が帰ってきたら、松山に赴き、宣教師とともに伝道と学校の運営にあたることを彼は考えていた。

おそらく、目下 D. C. グリーンの兄弟の家にいる日本人は、宣教師の学校開設とともにそこ〔松山〕に赴くのがふさわしいのではないかと思う。²⁰⁾

周知のように、沢山は1876年8月に帰国し、宣教師レヴィット（Horace H. Leavitt）と共に大阪で働いた。のちにのべるように、レヴィットは徹底した自給論者であり、沢山はその影響をうけ、その実行のために労苦し、それがためただでさえ弱かった彼の身体に悪影響を与えたものと思われる。もし、アッキ

ンソンが考えたように、沢山が気候の温和な松山に赴き、教会や学校の運営にあたっていたら、彼の生涯は可成りちがったものとなっていたかも知れない。

(3) 村上俊吉の按手礼式

このような経過から、1877（明治10）年11月24日（土）に兵庫公会で村上俊吉が按手礼をうけたことは、多くの人びとの長年の宿願をみたしたものとして注目される。当日は午前9時30分から近隣の諸公会の代表者たちの会合が開かれた。米国の宣教師15名、京都の3公会、大阪、浪花、三田、神戸、多聞、兵庫の9公会の代表者19人、その他の会衆は約300人あった。

午前中の会合に按手礼をうける村上俊吉と同氏を牧師に迎えようとする兵庫公会に対する諮問がなされた。京都のデイヴィスが議長となり、神戸の鈴木清が書記をつとめ、兵庫公会の石原執事が村上俊吉への依頼書を読み、佐治執事がその返事を読み、新牧師を迎えようとする兵庫公会に対する13カ条からの質問があり、その後、按手礼を受けようとする村上俊吉に14カ条の質問がなされ、それぞれ答えがあり、各代員は二階に上って協議をした。

午後は2時30分から按手礼が開かれ、讚美歌をうたったのち、新島襄が聖書を読み、再び讚美歌をうたい、村上俊吉の周囲に教職者たちが集まり、デイヴィスが按手の祈禱を捧げ、按手の礼を行った。ついでアッキンソンが牧師への勧告を、京都のティラーが兵庫公会への勧告をのべ、一同を代表して新島が村上と祝福の握手を交わし、讚美歌をうたって聖餐式を守り、大阪のレヴィット²¹⁾の祝禱をもって式を終えている。

アッキンソンは、この日の喜びをつぎのように記している。

この日はわたしたちにとって実に喜ばしい日であった。その日の出来事は忘れがたいものであった。村上は、わたしたちの教会のうちで改信をし、教育をうけた最初の牧師である。新島と沢山は二人ともアメリカに渡り、彼地でキリスト者となった人たちである。わたしは新しい時代の夜明けを迎えたように思う。アメリカの教育がよいものであることは、わかっている。しかし、日本の現場で改信を経験し、日本で教育をうけたものが最も適切な働き

を²²⁾すると思²³⁾っている。

4. 教会の自立性と主体性

上述のようにアッキンソンは現場で訓練をうけた日本人の教職員の養成を心掛けたが、その目ざすところは、主体的な独立教会の形成であった。今日中国の教会が三自愛国運動として大事にしている、自治、自立、自伝の三原則は、早くからアメリカン・ボードのかかげた原則であった²³⁾。また新島も「自由教育と自治教会」の二つを生涯の目標としていた²⁴⁾。アッキンソンも日本の教会が日本人によって主体的に運営され、財的にも独立することを切望していた。しかし、新島とレヴィットと、アッキンソンでは、同じ自立独立論をとりながらも、そのすすめ方においては可成り相異していた。その点を明らかにするために、彼の立場を書簡からみることにする。

(1) 兵庫教会設立にあたって

アッキンソンの指導の下に1876(明治9)年8月に設立された初期の兵庫教会では、会員のなかで仕事の都合で聖日礼拝に出席しにくい人びとに対する対応策が報告されている。一人は、家々を回ってボロを買い歩いている婦人の例で、日曜日に仕事が出来ないため、その日の糊口にも困るといので、会員たちがそれぞれの家に招いて食事を共にするようにしている。もう一人の場合、荷物運送の仕事をしている男の例で、彼には妻と二人の子供があった。ときどき仕事のために遠方に赴くことがあって礼拝を守れないので、彼は焼芋の器具を購入し、焼芋屋をして聖日礼拝を守るように努めている²⁵⁾。これらはごく小さな例であるが、いかに初期のキリスト者たちが、極めて困難な社会的経済的状况にあつて、聖日礼拝を守るように具体的に配慮していたことがわかる。

設立当初から兵庫教会は、村上俊吉に毎月の謝儀を払っていたことをアッキンソンは伝えている。

兵庫におけるもう一つの興味深いことは小さい教会は、私の助手である村上に月々の謝儀を払っている。これは、日本ではじめて牧会の働きに対して支払われている謝儀があると思う。わたしは、この人[村上俊吉]がやがて

按手礼をうけた牧師となり、教会が成長をなし、彼を全面的に支援する財的²⁶⁾能力を持つと思っている。

この書簡の日付は、1876（明治9）年10月18日であり、兵庫教会が設立されて二カ月たったときであり、村上俊吉は、アッキンソンの助手として教会の働きを助けていた。このあと兵庫教会の仕事をつづけながら同年12月から村上は『七一雑報』の編集を担当し、先述のように、翌年11月に按手礼を受けるに至った。

(2) 1877年の今治伝道旅行中の出来事

さきにも述べたように、1877年5月アッキンソンは小崎弘道と横山（二階堂）円造の二人を伴って中国・四国地方に伝道旅行をしたとき、今治滞在中二人の男が洗礼を志願してきた。アッキンソンは、前年に今治を訪問していた。一年たって訪問してみると、キリスト教に対する反対も強くなっている反面、さらに学ぼうとする者もあらわれてきた。とくに、今回の訪問では讚美歌についての関心がたかまり、聖歌隊をつくったりして歌唱練習がなされている。こうしたなかで洗礼を志願する者が出てきたことは、アッキンソンにとっては喜ぶべきことであった。一人は仏教徒でもう一人は無宗教者で、彼は聖書について可成りの知識をもっていた。それにもかかわらず、アッキンソンはこの二人に洗礼を授けず、今治の人びとがさらにキリスト教を学ぶために、夏期伝道師を招くようにすすめている。

日曜の夜 [1877年5月27日] 二人の男が洗礼を受けたいと申し出て来た。一人は仏教徒でもう一人は無宗教者であった。彼のいうところによると、三世代にわたって彼の家族は宗教を信じていないという。この男は、聖書を実によく読んでいる。おそらく、彼のように聖句を暗誦している男は合衆国においても、きわめて稀であると思う。しかし、彼は、十字架の意味を理解していない。彼にとって、十字架の事実は、きわだったことにちがいないが、彼はその意味を知っていない。十字架が彼の前に明確に立っているのを知ったとき、彼は「げに、然り」といった。しかし、彼のいい方からみて、充分

に理解しているとは思えなかった。わたしたちが去る前に、彼は全生涯をキリストに捧げるとのべた。わたしは、この二人のうちの一人は洗礼を受けるにやや適していると思ったが、結局、この二人に洗礼を授けなかった。さらに学び、さらに経験をつむなら、彼らはより充実した献身の生涯を長く続けることが出来るであろう。²⁷⁾

アッキンソンは、彼らがさらにキリスト教を学ぶために夏休みに神学生を招くことを希望し、彼らとその旅費と滞在費を負担するように要請した。今治の人びとは、二・三回相談をし、今少し財的準備が必要であるというので、アッキンソンは、もし神戸と兵庫の信徒たちが、旅費を負担するなら、彼等が神学生の滞在費をもつ用意があるかと尋ね、彼らの承諾をとりつけ、神戸に帰って、神戸の信者たちの賛同を得て、その年（明治11年）の夏に横山門造を今治に夏期伝道師として派遣している。こうしてみると、アッキンソンは自ら足で伝道しただけではなく、日本の教会が自給独立して伝道をすすめるように尽力している。

(3) 最初の結婚式

アッキンソンの書簡には、神戸における最初の日本人のキリスト教による結婚式の記録がある。それは小泉敦と田島ぜんの結婚式の記録で、アッキンソンの1877年1月9日付のクラーク宛書簡にある。それによると結婚式は、神戸英和女学校（神戸女学院）で行われ、アッキンソンが司式をなした。花嫁は和服、花婿は洋服であった。式のあと祝会があり、そのうち新郎新婦は人力車で大阪の家に向かった。小泉敦は当時大阪外国語学校の教師をつとめ、のちに梅花女学校の設立に参加し、沢山保羅とともに初期の梅花女学校の発展に寄与した。ちなみに、田島ぜんは、姫路の田島藍水の長女で、神戸女学院で教鞭をとっていたタルコット女史の日本語の教師をつとめていた。ぜんの妹たかは、1878（明治11）年4月25日に浪花教会の沢山保羅と梅花女学校で結婚式をあげている。

小泉敦と田島ぜんの結婚にあたってアッキンソンはつぎのようにのべてい

る。

お善さんは神戸の教会の熱心な会員であった。彼女はいま大阪の教会の会員として重要な働きをしている。彼らが結婚して住んだ家は仏教の僧侶のものであった。二人がそこで、キリスト教の集会をしたりしたため、そこを追い出され、より都心に近いところに移った。その結果として新しい説教所が開かれるに至った。わたしたちは、お善さんを失って淋しい。しかし、神戸における喪失を通して、大阪は力を増加しているのである。わたしたちは、このような形でよい働きがなされるならば、さらに結婚の生活に入るものが出てくるように望みたいと思う。²⁸⁾

なお、小泉敦とぜんが転居して新しくはじめた集会在機縁となって設立されたものが天満教会である。

この書簡には、神戸の学校で育ち、神戸の教会の伝道に貢献していたお善さんを大阪に送る神戸の人びとの愛惜の念があらわれている。同時に、神戸の教会と大阪の教会のつながりが、この結婚を通して深まってきており、さらにそれが沢山保羅と田島たかのケースへとつながってゆくことを暗示している。

(4) 日本人に対する信頼

先述のように、アッキンソンがめざしたのは、日本人による日本の教会の運営であり、そのために彼は、日本人教職者の育成につとめた。そして、その根底には日本人に対する信頼があった。彼は、アメリカン・ボードのクラーク博士宛の手紙で日本人の性格についてつぎのようにいっている。

これまで申したことからも、日本人がきわめて豊かな良識をもっていることを、あなたは御理解いただいたことと思います。日本人の国民性からみて、彼らがキリスト者になったら、自分たちで考え、主体的に行動するにちがいありません。もちろん、彼らは、よいと思えばわたしたちの助言をうけいれるでしょうが、それを行うにふさわしくないと思うなら、それにとらわれないにちがいありません。それが、彼らのためにも、わたしたち宣教師の

ためにも、また、ボードのためにもよいことであり、当然なことと思えます。わたしたちが望むところは、ひ弱で、自立心のない、そして動揺しやすく、無気力な、前かけの紐をうしろから引っ張ってもらっているような性格ではなく、自立した自主的なキリスト者の形成²⁹⁾なのです。

このように、アッキンソンは、日本人を信頼し、日本の教会の自由と独立を尊重した。しかし、同じく自給論を主張した、レヴィットの考えとは多少ちがっていた。レヴィットが無条件に徹底して自給論を展開したのに対し、アッキンソンは、自給教会の形成を目標としながら、状況に応じて徐々に現実的に至るように配慮している。彼は、自らがアイオワ州の農夫たちの中で牧会をしていた経験を通してつぎのようにのべている。

わたしは、農業の経験から、若い牝牛の最初の搾乳期には、あまり集中して乳をしぼらない方がよいという教訓を重視すべきものと思います。これらの信者たちのなかには夜の暗黒からぬけ出て太陽の光のなかに歩み、改信期の精神的なヴィジョンを充実させている人も多少あります。しかし、大多数のものたちは、まだキリスト者の生活の黎明期にあり、彼らは明け方のすばらしい光明に魅せられており、まだ自らや彼らの持ち物を捧げる訓練を受けていません。おそらく、今少し経過したら啓発されてゆくにちがいありません。たとえ、よい働きのためとはいえ、献金をあまり多く課することは、決して賢明なことと思いません。³⁰⁾

当時のアメリカン・ボードの日本伝道に関係していた人びとには、日本の教会とボードの財的な関係については、三つの立場があった。一つは、レヴィットや沢山保羅によってとられた徹底した即時自給論であり、もう一つは、新島襄や J. D. デイヴィスによってとられた全面的協力論であり、第三は、アッキンソンや神戸のキリスト者たちによってとられた立場で、漸進的自給論であった。アッキンソンは、教会の財的自給を目標としながら、そこには段階的過程のあることを指摘している。レヴィットの自給論が、絶対的硬直さをもってい

たのに対し、アッキンソンの自給論には、現実的な柔軟性があったということが出来よう。

むすびにかえて

われわれは、宣教師 J. L. アッキンソンの書簡を辿りながら、その働きと性格をとらえるようにつとめてきた。従来から、アッキンソンはアメリカン・ボードの宣教師として35年神戸に滞在し、中四国に開拓的な伝道をした人物として知られて来た。³¹⁾しかし、その性格やその思想などについては殆んど知られなかった。小論において指摘したように、彼は英国生まれの辛棒強い人物で、苦難のなかにキリスト教の信仰をもった人で、安易な妥協をせず物事の筋道を考え、ねばり強く実行する人であった。さらに彼は、日本の教会の自主性と自立性を尊重し、そのために、洗礼を授けるにあたって慎重であり、かつ、教職者となろうとする者の訓練を重んじた。さらに、教会の経済的自給を目標としながらも、それをめざして、漸進的に教会の財的な力を培養すべきことを主張した。これらのアッキンソンの宣教論は、神戸を中心とする伝道圏に浸透し、レヴィットの影響をうけて、徹底した自給論に立った大阪の教会や新島襄に代表されるようにミッションの財的援助を積極的に受け入れた京都の教会とは、ちがった教会の性格を形成していった。

われわれは、さらに、アッキンソンが既存の日本の宗教思想とどのようにかかわり、それをどのように評価していたか、また彼がその同労者村上俊吉と発行した『旭光』においてどのような論説を展開したかというようなことは、きわめて興味深い課題である。これについては、さらに稿をあらためて考究したいと思う。

註

- 1) 茂義樹、『D. C. グリーンと初期神戸伝道』教文館、1986。
- 2) 村上俊吉『回顧』警醒社書店、大正元年、49頁—56頁。
- 3) 高尾哲「J. L. ・アトキンソン博士の四国伝道」『松山東雲短期大学研究論集』第18巻 昭和62年12月参照。
- 4) 『創設期の同志社一卒業生たちの回想録』同志社社史資料室、1986年、180頁。
- 5) 今泉真幸編『天上之友』、日本組合基督教会教師会、大正4年、149頁—154頁。

- 6) 高尾哲, 「J.L., アトキンソン博士による最初の四国伝道」『松山東雲短期大学研究論集』第14巻, 昭和58年。
- 7) 『旭光』明治41年3月, XIV 巻3号。
- 8) アメリカン・ボード総幹事 N.G. Clark 宛 J.L. Atkinson 書簡, March 19, 1873.
- 9) 書簡, October 1, 1873.
- 10) 書簡 February 17. 1874.
- 11) 今泉真幸編, 『天上之友』日本組合基督教会教師会, 大正4年, 150頁。
- 12) 書簡 No. 271 Account of a tour in Chiu-ko-ku and Shikoku, 1877.
- 13) この歴史的な高知伝道の年月日については, 従来からの教会史は明治11年5月となっていた。それは, アッキンソンと同行した村上俊吉の回顧録によっていたからである。それによると「明治11年の5月であった」と明記されている, (村上俊吉『回顧』84頁)。ところが『七一雑報』をみると高知伝道の記事は, 明治11年5月3日発行の第3巻第18号に掲載されており, 「去月1日より土佐の高知に出張したとアッキンソン氏始め他の者は同月21日帰港いたしました」とあり, 最初の高知伝道が1878年4月におこなわれたことが明らかである。
- 14) 村上俊吉, 『回顧』, 警醒社, 大正元年, 85頁~86頁。
- 15) 同上書, 87頁。
- 16) 『高知士陽新聞』明治20年11月14日。
- 17) 書簡, No. 297. Máý 10, 1888.
- 18) 同上, June 19, 1976.
- 19) 同上, March 24, 1876.
- 20) 同上, June 19, 1976.
- 21) 『七一雑報』, 第2巻, 第48号, 明治10年11月30日。
- 22) 書簡, November 28, 1877.
- 23) D. ダウンズ, 「初期アメリカン・ボードの日本伝道」『同志社時報』第43号, 昭和44年3月, 20頁。
- 24) 新島襄は「自由教育・自治教会, 両者併行, 国家萬歳」と二つの書簡において記している。森中章光編, 『新島先生書簡集』昭和17年, 336頁および1062頁。
- 25) 書簡, October 18, 1876.
- 26) 同上。
- 27) 同上, August 7, 1877.
- 28) 同上, January 9, 1877.
- 29) 同上, February, 5, 1877. なお, アッキンソンの文書は格調の高いものであることを示す一例として, 引用した文書の原文を記しておく。We want self reliant Christianized characters rather than weak kneed, vacillating, flably, hold-to-the apron string style of character.
- 30) 書簡, November, 28, 1879.

31) アッキンソンの四国伝道については、高尾哲氏の前記の研究がある。

J. L. アッキンソン論文、著者、書簡一覧

論文 『旭光』掲載論文及び関連記事。

「完全なる洗礼」	明治. 29. 1, II- 1
「日英同盟と新歩」	明治. 35. 3, VIII- 3
「神の深きこと」	明治. 35. 4, VIII- 4
「基督教は実際のなり」	明治. 28. 5, I - 5
「宗教家と信仰家の区別」	明治. 28. 8, I - 8
「健康と強社」	明治. 28. 9, I - 9
「アメリカンボードより派遣せられんとする4名の委員を 紹介す」	明治. 28. 9, I - 9
「神」	明治. 28. 10, I -10
「天国ノイス 一天国とは何ですか」	明治. 28. 12, I 12
「看病法の沿革」	明治. 29. 2, II - 2
「基督教と奇跡」	明治. 28. 4, I - 4
「神学には変遷あるも聖書の事実は動く事なし」	明治. 28. 6, I - 6
(広告 「京都福音学館新入学生募集広告」)	明治. 32. 8, V -8)
「宣教師アッキンソン牧師原田助両氏を送る」	明治. 33. 6, IV - 6
「アッキンソン夫人就眠と其葬儀」	明治. 39. 5, XII - 5
(広告 アッキンソン著『赤十字社之起源』, 旭光社, 明治36年)	
「アッキンソン博士の就眠と其埋葬」	明治. 41. 3, XIV- 3

主著

- 『献金之説』米国聖教書類会社, 明治19年
- 『天恵求法』Entreating Heaven's Favor' 米国聖教書類会社, 明治20年
- 『赤十字社看病法之起源』(村上俊吉編) 旭光社, 明治28年
- Prince Siddartha, the Japanese Buddha, 1893
- Ten Buddhist Virtues, (亜細亜協会) 10篇中3篇を結了

書簡

(The List of the Letters of J.L. Atkinson 1873—1880), No. 242 などの番号は
 アメリカン・ボードにおける書簡番号, () 内は竹中記。

No.	Date	Place	To
	Mar. 19, 1873	Earlville	Rev. N.G. Clark
	July 2, 1873	New Haven	"
	July 15, 1873	Sharon, Conn.	"
	(Concerning Wallace Taylor)		
	Aug. 4, 1873	Dubuque, Iowa	"
	(Departure)		
	Aug. 31, 1873	San Francisco	"
	(The eve of departure by ship)		
	Oct. 1, 1873	Kobe	"
	(The first letter from Kobe)		
	Nov. 15, 1873	Kobe	"
	(Welcoming Mr. Leavitt)		
242	Feb. 17, 1874	Kobe	"
	(Death of the elder daughter, May. And a thief entered the house on the same night.)		
243	May 18, 1874	Kobe	"
	(Hoping to gain access to Kyoto during the year. "I shall prefer not go as a school teacher".)		
244	Aug. 10, 1874	Kobe	"
	(Government appreciates the medical work, but evidently does not care for the Bible work.)		
245	Dec. 15, 1874	Kobe	"
	(Unable to enter Hiogo and teaching in a heathen school.)		
246	Apr. 19, 1875	Kobe	"
	(Beginning Christin service in hiogo, March 28, 1875)		
247	June 8, 1875	Kobe	The members of PC
	(A further appropriation of \$2,200 for the completion and furnishing of the Girls' School)		
248	Nov. 20, 1875	Kobe	Rev. N.G. Clark
	("Departure of our Davis for Kioto. The work here falls into my hands".)		
249	Dec. 6, 1875	Kobe	"
	(Reports of Nov. 22, 23, 24, 28, Dec. 5)		
250	Jan. 3, 1876	Kobe	"

(Reduction of the appropriations)

- 251 Jan. 3, 1876 Kobe Rev. N.G. Clark
(Visit to Amagasaki. The story of the Kobe native daily paper)
- 252 Jan. 19, 1876 Kobe "
(Concerning Mr. John Gulick. "We need—not number—but men who have eyes, ears, tongues. When the roll is called, we want it to be a roll that counts".)
- 253 Feb. 1, 1876 Kobe "
(The incidents from the field)
- 254 Feb. 2, 1876 Kobe "
(Concerning the appointment of John Gulick)
- 255 Feb. 7, 1876 Kobe
(The service in Kobe)
- 256 n. d. Kobe "
(Sending the article concerning the Girls' School for the publicity)
- 257 Mar. 7, 1876 Kobe "
(Our Girls' Seminary on Kobe, Japan)
- 258 Mar. 15, 1875 Kobe "
(The work of women, Ofujisan. Arrival of a fine Mason & Hamlin organ from the Iowa State Ass. Concerning Sawayama and Neesima.)
- 259 Mar. 24, 1876 Kobe "
(Concerning the cooperation and unity. "The same name, the same church officers, and same creed at covenant. The rules are not alike".)
- 260 Apr. 26, 1876 Kobe "
(Account of a tour to the Island of Shikoku)
- 261 May 2, 1876 Kobe "
(The baptism in our Kobe Chapel)
- 262 June 19, 1876 Kobe "
(Concerning Capt. Janes, Locomotive Storkers)
- 263 June 20, 1876 Kobe "
(The visit of Mrs. Pruyes and discussion on the girls' school building)
- 264 Aug. 18, 1876 Arima
(The first vacation, the organization of Hiogo Church, Aug. 6, 1876)
- 265 Oct. 18, 1876 Kobe "
(Three items of report on Hiogo Church. [i] an old woman [ii] a potato baker [iii] the salary of Murakami)
- 266 Jan. 9, 1877 Kobe "

- (A wedding of Koizumi and Ozen-san. The first funeral and burial of Japanese Christian.)
- 267 Feb. 5, 1877 Kobe Rev. N.G. Clark
(Concerning the church building in Japan)
- 268 Mar. 5, 1877 Kobe "
(A young man returned from U.S. after seven years. In the midst of another civil war.)
- 269 July 5, 1877 Kobe "
(After returning the trip to Chugoku-Shikoku. Baptism of ten adults in Kobe.)
- 270 Aug. 7, 1877 Kobe "
(“This pioneering work must be done. It is pleasant work. It is hard work. It has elements of danger in it. But it must be done!”)
- 271 n. d. (Account of a tour in Chiu-Koku and Shikoku)
- 271 Sept. 4, 1877 Kobe "
(Wedding of Kuki’s relative)
- 272 Oct. 9, 1877 Kobe "
(The view of Leavitt as the extremist. Tamon-Dori & Kobe Churuh news.)
- Oct. 30, 1877 Kobe "
(Organization of Tamon Dori Church [Oct. 20, 1877], on The Shichiichi Zappo)
- 273 n. d.
(Letter from a Japanese from an interior village distant from Kobe to the West, 140 miles [To Mr. Atkinson from Hashimoto Yoshitomo])
- 274 Jan. 10, 1878 Kobe "
(Establishment of Japanese Missionary Society [Jan. 2 & 3, 1878] Sunday is the red letter day literally.)
- 275 Mar. 29, 1875 Kobe "
(A physician in the Tamon-Dori Church. Mr. and Mrs. Cary have reached as safely.)
- 276 June 26, 1878 Arima "
(Concerning John Gulick’s appointment)
- 277 July 8, 1878 Kobe "
(Prospect of church building in Kobe. Japanese character of self government.)
- 278 Oct. 21, 1878 Kobe "
(Organization of Akashi Church)

- 279 Jan. 6, 1879 Kobe Rev. N.G. Clark
(Dedication of Kobe Church Building. Trips to Okayama, Fukuoka and Imabari.)
- 280 June 9, 1879 Kobe "
(Organization of the churches in Hikone and Yōkaichi)
- 281 Feb. 25, 1879 Kobe "
(Suggestions for The Herald. The wedding ceremony at Hiogo performed by Murakami.)
- 282 May 12, 1879 Kobe "
(Before leaving the trip of Chiu-Koku and Shikoku. The problem of native pastor. Visit to Tokyo & Yokohama.)
- 283 May 30, 1879 Kobe "
(After returning a tour in Chiu-Koku and Shikoku accompanied by Dr. Yamada who retired from medical practice in order to give himself fully to direct Christian work [May 15-29, 1879])
- 284 July 5, 1879 Kobe "
(Concerning the annual mission meeting. The problem of selfsupport. Sending of \$2,000 from Boston to the churches and students, additional \$50 for the unmarried ladies.)
- 285 Sept. 16, 1879 Kobe "
(11 new members in three churches in Kobe. Invitation to Matsuyama. Leaving for Imabari by Sept. 18.)
- 286 Oct. 7, 1879 Kobe "
(The formation of Imabari Church on Sept. 21, 1879. Cases of a stone cutter and a rice merchant and a carpenter.)
- 287 Oct. 28, 1879 Kobe "
(Advocating what Miss Clarkson status)
- 288 Nov. 28, 1879 Kobe "
(6 stations idea, a service of ordination of Mura-Kami. "One agricultural maxim is that young heifers should not be crowded too hard on the first-milking period".)
- 289 Dec. 29, 1879 Kobe "
(A trip to Annaka with De Forest for the ordination of Yebina)
- 290 Dec. 30, 1879 Kobe "
(Concerning the mission meeting in Osaka. The chief item was the Kioto School. We have now almost \$20,000 in Kioto without one particle of control, and Kobe Girls' School.)

- 291 Jan. 19, 1880 Kobe Rev. N.G. Clark
 (Report of Matsuyama by Ise)
- 292 Feb. 10, 1880 Kobe "
 (The sickness of O.H. Gulick)
- 293 Mar. 1, 1880 Kobe "
 (Problem of subscription. First united work among 3 Kobe Churches.)
- 294 Mar. 26, 1880 Kobe "
 (Report of Kobe Station)
- 295 Apr. 13, 1880 Kobe "
 (Returned from a trip to Shikoku)
- 296 May 10, 1880 Kode "
 (The Japanese are so intensely Japanese. Concerning Doshisha, a trip to Fukuoka and visited Fuwa.)
- 297 June 1, 1880 Kobe "
 (After the annual [mission] meeting. \$200 for a kitchen and a small gatekeeper's house at Kobe Girls' School. English textbook. Discussion on the women. Annual health travelling allowance, \$5 for each child.)
- 298 June 15, 1880 Kobe "
 (Discussion on self-support advocated by Leavitt in Osaka. Three reasons for passport. [1] sightseeing [2] scientific research [3] health. P.S. on installation of Matsuyama, June 4, 1880)
- 299 June 24, 1880 Kobe "
 (The view of Leavitt—the extreme idea)
- 300 July 27, 1880 Kobe "
 (The Second General Convention of the Native Protestants of Japan in Kobe. Visit of Pres. & Mrs. Angell of Ann Arbor, Michigan.)